其砧序

元文庚申のとし九月十二日は我師
来翁乃七回忌也。されは光陰のはやきよ
りもなほ移りて過ぬ。面影をなげかるゝにまして。
深み其徳のむかしく。その恩の深き。ゆへあり
報をなさむとこそは伝きせられむや。僧を万部の
誦経よりも。一字乃俳諧こそ。風騷の道の
大法事なるべし。其志をつとめて伝へやす
からむと。其徳の述て弘めかくなれは。ありし

社友平砂によつて。行状の大むねを志る
せし面相のあらましを忘れしむるに。我黨
の礼拝れ為にまして。旧知の回向の便なるらん
とあり。此あはれ言語の絶へなく。さて作之の
旅味をよ添らしてあらく師の紋照らへき荘厳
乃心そそいそん。さてや其記よいへることく。先師
八度の選集の中にも。ひよわ代く廃の全備する。
此稿をその志ふれ共にとかしけて。其の初子れ
玉箒よわれ。よもひく其のたるときをいふのみ。

謝桜乃工ミして見れば。いろそあらきぬの
ぬりく多く。誰か夜宴れ当ひとたまらんや。よりて
百家乃錦繍をそこと見ん。何やあはなわそのひ
ぬ。院の桜は木より擬らくせとも。千声万色乃
いそぎはるも。我かごの不易子れ名よわ起れむ。
さきぬらむぞ深のめりける。我師　寂光の
うつるにあわて今や此音を安ぬらん。
まよひ君れ雲乃ちらそてよ。便なくは空
れもひやるのみ

一時元文五庚申載秋九月日
北梅市霧菴主富岡有佐
謹叙

其砧

桑翁行状記

皋平砂

抑我師ハ東武ニ生徑て。風雅を四方ニ及ボす也。
たれむはしめの名残塩車といひ。又字を永房と
いふ。桑ニ畔と標するのハ。桑岡氏ニよりて。
ほと粧しまる號なるへし。貞享丙寅のとし
春の始ニ。晋師初懐紙をふところにし。ある
かた人林書店ニまうでし時。李師も亦捲ニ示

あるそへ。ちかうくほともすへて悔をしらし。せう年
からかやさなりしが。この是を入門のむしめおもふらん
時に棠翁年十五かくて平砂の名をゆるされ。萩の露れ
選場に侍らむ。時年廿二日枝に吟句をとらしめく
俳諧詩学へうつ事あり。然るあまたの試筆にも。
年のうちの先今日とおもみたり八晋師が星自枕
といひし年なれし。祖翁も武陵においたりし也。
其代の風姿をまなびしありける。晋子元禄年中之句附合等往享保乙卯歳且有佐初再板而出
八年の魚やまさで飛ぶ。放生会八一十竹が

あらわれたる。延命冠者の奈良あわたり。元禄十丁丑年されど
より是非の境にあそびす。栄辱のちまたに我をまとはせ
て。花の秋を墨よりなしはわ。了我法師といひしか
なあり。猶風雲の変をもちあへし。東西の旅す
たよひて。ある年ハ伊豆の山をよ隠れ。ある
宮古の片里にいかて。あるもも庵を結ひむすをれ
しふ。入逢坂ハ我にあたる情なれきとさす。この年
奥羽の地に迎へられて。志はしハ関東をよそにしまれ
まわ。於にゆそひし友あわたるが。夜の関路の

わすれぬ程に。暁の声をうらみてや。晨雞載鳴残月没といひし。白氏がことばによせて一番鶏の一集をなしぬ。抑うち続きて二番鶏。かつ〳〵位ありけれんやより又ふるきゆへのたぐひしそ。おづ〳〵しめる甚ともしこそ。
聖廟の御忌八百年。又我が上人五百年。宗祇法師二百年。貞徳翁の五十年忌にあたれり。元禄十五壬午 そのく其名を残すのみしく。その跡を忘れぬは。此付こそ幸なれと是。晋子は誰かれとおそからぬ。貞佐と改めて

おもはずなりぬ。此はかの集に鳴そむるなり。晋子没後に及びても。狂而堂の書籍を模しく〳〵。ます〳〵新奇をたくひ出るよ。向数は盃の数を本わりく。桃李園の罰さへたゞ銭。瀬鮮を辞して滞りあるとて。木賀芦の湯にやすらひけるが。自然に新山家の題といはん。集ノ名ヲ七泉ト号ス祇空子之筆跡。所詮は鶯乃声も讃をわすれて。多延の里に杉をむかふ時は甲斐の声に根をたどりねくとちがひかり。やうやく都の余花に摘つかり。作ハ春夏賦正徒六丙申出 あるはほくだしの

もの季なく。既にかつしの平河山に葬事。
秋のはじめ露の前に。むなしき名のみ
残しぬ。墓を備へき四面にむかへは。
すでに其親戚思ひ侍る。いて経此翁を。
四十餘年の労をつもりて。精神を風雅に
傷らる、といへ共。功名ハこの八部におさまり
て。なんぞ百世に伝へつたはらんや。

右ハ先師ノ夜話ニモトツキ諸集ノ時代ヲ考ヘ合セテ
其事ノ先後ヲ推察ス先ハ選集ノ功ヲナラヘテ
爰ニ師名ヲアラハサントソ是一章ノ大意ナリ

去来先生肖像

蕉葉雨滴
寶井分流
佗意新誦
趣向頓浮
花咲東日
月晴西時
一身風骨
解衆人頤

旹元文星次庚申季秋九月日
門生新花林臯興微中畫併贊敬書

翁在世之時。我嘗画此像。々再摸之而。弘永傳其状
尓。猶繪事未学。被世人然之。漸録而。奴唯以依稀
踈影。慕七年之昔耳。

題辭

先師終焉の年ハ鶉菴年一盌光をあら
たし小祥忌にも弔隊の駒蹄をならへ三周
にも平砂三盃酢をあつめて物さきね
恩謝乃志をしとせり去年こそ七周の追薦に
ハ鶉子又を生かわ阿の川にかゝらむとぞあり

我くも師のあるとのよ秋の風　鶉庵超波

と此友のこゝろおもひやりかく八里ひよせらきてハ我
はらゝ隔も病に臥て終ニ又月末の七日なき
人の数に入ぬ嗚呼其吟の厚く其志のをさく
はさらになかりけりことを係さらむや今出れを
題して其志を継亦これを識しよす
其人をこゝふ

追福歌仙

多かれさる今なる四方の秋なから　有佐
畔耳並んで稲鍾み出る　祇丞
夏お撲屋に寄らぬ月秋かな　筆端
印籠みさうへ手を咲きかり　其川
上臈を見劉くして旅人　平砂
男よ茄子のまろ尖もれく　執筆

懐舊之句

来ゝ蜂白粥佛ア之一句をのこされしを
既に七ゝ世のむかしとなりぬされバ
此叟ハ我門の誹祖にして其いとなミこそ得ず
何かのころころともとくまより合せて
糸車のまえ付めぐるのこゝろを思ふに

今もその記念に照や浮秋月　祇丞

来ゝ蜂の主人ひろく風流の名を高く
きこえしされも甚深る日く月くに
厚きをやとろ有平安年懐旧の一冊
をあつめても此風の流にきこえ
善故人の光をあふぐ

おくれまじ八香も七年暮の秋　筆端

師我に安摩羅果をあたふ
実に誹諧の井々哉ときはなり
しもしやうすいそ世に
打まかせ

あすのこやまく梨も名乃あまたこそ　其川

追福之吟　并秋日之清句合記
序次以到来之先後

六歌仙そろひもそろて柚味噌哉　弘武

遺物にありぬ様凡の命哉　長梢

めくる日秋あまりや暮し秋の空　萬花

此浮に花あるきむし物語　乾什

いにしへむかし或日矢佐来て予ニ語く郭公の句ありけりと自讃せしも亦むかしより有りけるよと思ひ出て

秋今年冬そ一日志ぐし凩　鋤鱗

鷹やすきゆりそ来の霧時雨　歩水

かき〇花ハ余情ふあり寸菜のむ　瓦雛

されハこそ白翅ふ改る窓の庭　其雪

百生の豁落去秋ハ旧哉　畦紫

髪ふも除る掛ハ手の三のり哉　言下

杉や萩何棹康の舟あらし　沾旭

名ゝくや鴫の羽を上るまく　理圭

初丁や宝〇袷の小袖衣　可久

槿の露けくぬらむむし哉　女 雨柳

花も実も匂ふやむしノ月の秋　鬼游

とう菴ても蒲団纏し康の声　沾灛

もう一ツ日ハさわ鉄るるみち哉　同

紫ハちりし住風ふ柳の姿哉　鬼水

負来て秋ハ戻るや艸の露　磬志

苅稲の江すゞしや水鏡　金幣

其印や新月色手向艸　拾魚

細のミ紅緒とぬれ行菊の露　其谷

中蓋の露や廣りる法坊池　半扇

わか伴ふ袖を濡しぬ露椒　不深軒 蓮十

紫苑とハ名付姉る手向りな　如波

七里あるとて露那や来の杖　木董

枯葉や池乃面も菱の紅　廿石

樂人も越ひ来ず秋の暮　糸深

むら雨やまつ降方ふ康の邑　五出

大寺の管絃むまき花野哉　沾山

麦蒔すよい日見てや汁菜の秋　和丈

廿干や夕日ふうつる栽法師　布川

稲ゐ葉ニ度の光や後の月　湖水

風まして姿を鋤す聖菜参　白詞

江戸よ雲の女ハ見しぬ秋の果哉　露充

手向艸石碑を照らすもみぢ哉　東雲

玉嫁り月日をうまそ三る人李　我等

酒の恩や菩提子も今切成く　青立

心当に萩の折箸挽の客　舊室

酸醒乃佛果に至れ梨の味　殘鼠

小男鹿に富士の斑をおもし哉　平砂

春ましも停子風や花蔭　嵐翠

桂華雲千里
高名士一丘　潮朝子

桐乃葉も色を誘ふや秋の声

出れ迄寺暮くと虫　有佐

浅つ伏猿手も臥く自ら暮果て　沾山

さらつく私千陽る獅落　百之

纔ばを〇猿も這出る臺の傾き　其慶

代々よ松千鹿切乃　梅枝

九

自と日代六親ハ後の飾物　有佐
書く蔦兼る波ぬ白浪　潮朝
一村ハ名風呂一ッ目ぎ通し　百之
象の来ぅ隣ても撮　沾山
鉄線花の結ひ返しする花の筆　梅枝
節雛ふくも孫の森乱　其慶
誉も忘れて猫のうき声　潮朝
座猫くとくよ鎌倉　有佐

十

法の字ハ紙題目に背けまわ　沾山
見もせぬの布袋弁極　梅枝
夕波乃躍き上しる秋の自　百之
童も小舟よ雲にかくれ　其蔓
澤蘆れ猶次生去く丁時て　梅枝
聊うすぐれても唐人の手紙　潮朝
故ゝ生紀昼の碁盤始前て居　有佐
園韓神ハ法ぎもおれお居　沾山

若連くも古い小袖の古袴　其芝

こみ付る銭を投て出る妻　百之

宗掛に瘤を献ふ刀　翁　有佐

をい内幸の東をゆ方　潮朝

聖の日も移さぬい帝の為そこ入　沾山

雪うら出京又雪へ身　雲芝

川千鳥手しるのむごい咄取の坊　梅枝

四五年鳴し初潮の隼し　百之

梳直す髪て壁を楯て弘　雲芝

青破瓶をいすみの縁　冬佐

傘の追人ゝ若を晴上て　百之

大工の眉結屋乃流れく　梅枝

法花宗明香風もならぬ物　潮朝

如形池乎蓮ま緋経　沾山

みしかき日廣野の秋に醉ともかな　百菴

花芙蓉手向も筆の壽の菊　冥仲

名の人は文字紙作り十三枚　義水

蕣やいつ見鮮ても吾主なる人　宜通

獨して目のあく沿や　菴　魚貫

東ニ畔貞佐居士ハ風雅に富て世の師とす
てすなきものも亦更に予かの門に遊ふ
といへとも友衆盛命のいとま所きりて
志をむすふりき今まて七年の古史と
なれなく涙とゝまる性昔をしのふの
露菴ニテ長月七めくりの書誌を退

て自他よ此旅の一句を求む彦房行古吏の
歩ミこに同しくれをまさに若猶の人く
こひて春松と號し御志を俟侍して云事を

指を折る手の積りやきもくす　冠之

七府よ浦越芝蕗は霧　有佐

ぬれくと髴の九森自晴て　捫虱

さら屋おさまれ風静し　𩿘鰐

茶柄杉の園生の冊乃からちき　平砂

形も咄しもおかしき人　春旭

水の粉に宿る　くゞハ道明寺　佐

鶉乃声しに　丈婦帯絡　餞

諧上ゟ下語て　二階ぞ声の山　乱

日ましに痩の来る郎等　之

献主にあれは智恵ハ借ぬや　旭

此の行く話の徒ハ　来るなと　梧

月秋よし四千四と闇に酔あかす　餞

こもりすの為持しこそ　秋　砂

す
壬生の中へ引裂やはらゝ馬　之

三浦三崎のいとまよね　魚　佐

螻ハ鼾に紛ぶ　空らす　砂

ひまくを隔る荒神の錆る　梧

今も其諷る一句残　姿花　旭

夢やハ隠るし義貴の枝　白雲

一葉にも秋の音あり板庇　蔦巣

三ゝ代る花ハむかしに三井の鐘　橋之

末ゝ行の人に木戸なきもみちかな　邊

飛る山いさむ野にハ西り奈　有隣

松杉のみなへあかす夕日かな　土波

あはれさん野の中乃細流　佳水

七夕の日数もむかし行秋や　棘菴

照添ふ畔も譲りて葉紅葉　陳人

七年のとし白菊の後　大蛟舎 道雲

紅乃声おく咲て枝かな　虹波

蔓すけ三葉籟ハ七〇去の下　貞陸

第ゝ畔ヨ出疾川維子娩まる所を
かぎりともしまかせ

秋鮭を向ひて稲但　律山

る法なく木ハさしてなき茶野かな　紀厚

七夕やこゝに粥と盆了寄　緝葉

ほとこせや椎の実ひろふ袂まて　三岱

南京の跡でおませう　菱の花　巫
只の隠居も元政乃例　代
化る氣ハなくて狐の主習ひ　何
法ね留主の星を見へる　巫
絹着ても勝ぬひけハ赤顔　畔
菜と噂て葉生姜を嚙　代
棟上の目銭挟んで三寸陶　何
あぢくハ包む寄の壱山　畔

川越の客ある内も五六町　巫
貼痛者によい伽そうし　何
あつらへ髪内やきハ明星先　佐
墨うすくとも細度胡麿　畔
夜ちらし管絃道具ハ古のもの　巫
拝む其手を折るふの丈　何

光陰ハ弓張の飴におさへ矢は　傍存 鷺孝

遅く小入日の飾る秋の山　菘川

雨雲のときれも山の紅葉かな　芦葉

常よりは松も目立や山の色　三之

東雲や雁を見ゝす梅畑　素渕

山松に露をあぬ伊達や葛紅葉　佳卜

芦の種子零けり○まじる鴫哉　拾翠

飛ぶ鷺や欄干に見る花の橋　呉秋

歌僊

後の月翌といひしを七回　巴行

縁ある園は茶師草なる　有佐

秋風の謂も物すむ色らく　平砂

どうしで置にきえて○とも鶴　其圭

用算筭あまりける日は雨さめよ　歩水

陶安枕口は渡らまへ　言下

尻からや雪割艸ハよい元気　歩牧
あつめ拗て待合が婕　冥仲
鮒の骨咽を掛絡てハ撰ます　瓦雄
梛ちつもしの治津趣り　巴行
我系ハ女ふうを紀紋而　圭
甘干祈るいろ〳〵のハなし　年佃
月去ふ不肖ハしれも孫庇　玉下
華壇の札を面ノ書　歩丸

鼻紙とめされ細帯茶覚髮　有佐
隠して弾を詢出しよ弾　瓦雄
居まるそこハ極めて戻る訴　巴行
吸口嗅ふて歩まつうし　冥仲
發心ハ花みひ得むよ愛　歩丸
勤めすれん去の徳へ　瓦雄

こゝろよき二條通りのしも野　何心
あましくよ杢子笛の秋嵐　千龍
関てここそ知られ人目の関破り　老丁
盃も手ふれ始めとなる　其仙
古川と清くもわかぬもと荒木乃（石虎）　長鶴
田際の布を踏通ふ　羊素
木も艸も岸も月照る真盛　千龍
若く扇の襟をわすれ　有佐

多
白露も精霊の類ひなり　老似
年とおもうて乙女ハ人　何心
草扮の粧みかけ合ふるさハ　玉信
別元結乃やうなあはれ　老丁
道ゝの葉ハ高く萩の罷　羊素
温みく泥の畔の水際　長鶴

江とらや萩のむら雨七評　常仙
露けんしみ乃葉裏へ菊花哉　杉洲
秋やおもき嘶をききの夢　杏洲
捨ぬ身して狸にも波よる尾花かな　可國
文華天才映る野山紅梅紅葉　蘭笑
一夜ふしくへゆえぬや我々の手向草　梅笑
水上の錦ハささる紅葉川　元笑
菓子鉢や菫の茎は木ねぶ柳　紫笑

草哉出て月ハ武蔵野の
月行水　和鶯
芋の葉に子玉もなき寸　宗阿
夏中ハ出もなく雛の旅として　其水
くるしさに和がへ一　恐々　東風

十とせ經ぬ中頃此句にも
各自筆執て記す所也
十人は酬和九人形し
といへ給りしがへて是い
四人のむとわかれ帯る哉
哀におほえて

吹するや手に葉は
上下露時雨

李喬

黄に染む袖の雫や来ぬ雲　底蛙

ぬるわ末て九日葡萄の名残哉　貫十

報恩の此秋機様七年忌　調和

十三秋尾花の末の炭俵　笠澤

七まとひ這廣て滿や菊のつゆ　露月

人上をおもふせかまし此一葉ちる　茶秋

哀寄七莉におけるる萩芭　虎文

名月や團扇を忘る捨ける　珪琳

推敲

賈島もとハ無本といふ
僧為し　僧ハ敲ク月下ノ門
貞佐もとハ了我といふ
僧為｜　又敲ク月下ノ門

在昔朝叟に會ありしに
某與其角いさかう沽徳
先キにとれり沽徳いへり
了我いとらハ俗となすへし
朝叟に兼て志めして俗の

衣数を支度して置けり
其角よしく 捻テ是ニ二子
相語テ以テ稱ス自佐ト雖ニ其角門
人ト云うち沽徳親切なるゆへ
也へり 物故して 沽徳に

同ニ小碑ヲとゞの也時ありて其
到ルときハ看核の設ケして話ル
昔ヲ嗚呼七回忌なるかな那

弌鳩林　午寂翁

其砧下

歌仙

僧ふ成俗ふある身や桂乾　午寂
本末長き一生乃秋　有佐
仙皿割てハ庭の掃除して　其道
[illegible]やしえま○不尖請ふ　有林
かいろゝ南楠の下葉へ玉霰　吟國
きゑ上もゐ　踝　文佐

霜の為さす傘ハあわかわり　き色

病気といつも四季の果物　有佐

三日月に立材木の末かくれし　弟夫

あやてに鶏の啼きれくの　有林

無茎の柄ハ寄そく司まあらん　平砂

虹と看に宴盞明　午寂

いきぬ悪屋画れハ家かくわり　き色

眼紗画せくまく画る道　性水

未

生年樹の止むゝ人の無数端　有林

簾の中も郭公あれし　子住

白雲ハ出あへる峯をうつるみ　有佐

いつ垢摺の失く長生　弟文

倚子囲坐左右のむ乃横取る　吟園

要なる中日平説　平砂

紺菊も紫にふかく光哉　貞屋

手向して七艸や菊の水鏡　芝山

出水や芋殻流るゝ萱か軒　西坡

掛出して鹿を聞やあらし山　竹瓦

入月や里へも夜の代ゝ蚕　文石

烏帽子汁黒くあめしの自尺哉　沾風

初しやハ家の有旦那寺　物我

盃に菊の薫移す菊の露　萬效

携山へ一聖ならあへぬ如言也　梅枝

秋風を第一にする小萩かな　蘭予

おしまれぬ萩娘や下もみぢ　士貢

崇の戸に蔦も離され小盃　其慶

ふるし秋隆も力の聖守哉　百之

筆捨ハ折よこそあれ薦る菊　佐江

振下ふ惣人のもちや花薦　携山

秋の夜や数ハ四向の七ツ証　長鶴

画きハ一先祢宜へ持こうち　声
氏留人を今て思ひやる　自
鉄明小古き鎖銭ほぐ分り　川
備と云るより会点してそ花　石
書の役目を脈あらし出されし　自
定く詠行し和歌山の塩　季
芋す塵くの名残れ十三夜　石
何ちれハ紙魚の土玄帳小浦　川

人献くうちハ留書のまゝ下らす　芭
貫つく去の禄見えし主　自
都ぬ寂ても妻ハ鮮肴　川
このよひ勤めよ雛や炼らん　石
桂石と孫氏乃皇ハ應款　自
井戸の形ひ十尻一ッ打　季
飯次乃盖すおそ夜の未て　石
怡阿の銭を哥ちしよ借　川

誂への示ノ軍者の気を配ヿ　摩

乏しこそせめ年中の嶷　有

久しうて鏡臺山ホ丁と有　川

木賊するのむらハ何ところと　砥

初茸を生て備ふる内指佛　ろ

煙柴の鼻ホふらはく　川

当代里さらで服掛渡けへし　砥

菜を蛙ろく　嵐醉せる　有

光切て尺腰よ変　兼曇　壱

像　木の芽れ摺足て奴急　川

翠ハ今そ炭屋ホ用ハるい　有

為　床の名代ふあふせ冬り　声

羅漢生五百の質氣その佐よ　川

業うし写して書しこを私案　砥

あら銭親のいさみや後の月　米仲

年くれ菊の栗乃十二日　撰居

惜き名の風よ荻しら露かな　喬阿

秋のふこそ雫せしがあ陶の川　可圭

女郎花きのかゝすや萩様　求圭

蘇下迷を覺も下の城　三圭

名月や親子して啼鹿の声　知圭

其秋も鳴のとつれ蚕紙　常丁

菊月やいなみの雲路一ちぎれ　蘿遥

色も香もまゝ涼ちる子の月　杉風

勝負八手入競や菊の花　蘭秀

名月や戸障子も種に出るまで　青峨

初茸見に不思儀や下戸も小盃　大梅

茸名の呼聲に照や濡佛　移石

花見より呼菊の友枕減ゐなり　曽夕

生身玉笑ふも往のある日乱　連馬

翌の月今もおしむや十二日　羊素

うれしさのかくれおいや芦の色　陽十

目横子に稲りけりける下枝哉　沾郎

灯すとも佛明るし菜の花　大櫻

風流の人置後に落る春　栗也

秋風や竿に捲れる夜烟織　栢莚

子持とはいさみ出るや大踊　三升

物毎の満るハいやし十三夜　宗阿

歌仙

菩提子を拾ひあつめん法乃場　民砂

室の戸深くかすむ啄木鳥　平砂

十日ろ後に気を付る人の来て　有佐

ありしらぬも食そうし　市石

舞にかに縮の袖をきてまはり　西坡

階子りせく樹の枝をおり　氏

ウ瓦形わきと説く三粒降　石
坊主襟打を撲打乃寸尻　作
香煎ハ袋で亨てゝ手掛あり　砌
御芽ゝ君へ机買り　坡
川くゑの織さす機ふ郡广をゐる　民
物打もよ身のゆるい指要　不
雪の目精も気根ふ茶やめ　坡
盤絡されかかとうく　砌

無懸まも口ゆらるの土器そこ　作
もつ雷を屋そ村く哉　民
花蓮放下来ひのかこまり　不
神馬欠出し老き艸むむ　作
ナ祢ちれしると切れゝ一度つむし風　砌
爼板よくて木曽ハ佬し紀　坡
咒せまの仁戚とハ亨てす眼気　民
撲揺絵丁子及もあらいし　石

又ゆくの宮鞘しみ寺るのハなし　侍
鳥よ入れ白哉姤雛ふ雇ハれ　硯
閨建る大工ハ来を学むらん　坡
鍬と以ふ習ふ去哉　迹　石
利酒のあるを笋鞠へ吹　侍
清元二重一むすし究　硯
木賃らけむごくあらね自ハ浅　民
天上まづりわけて摘よし　坡

端唄の謡て栞をわきらひ　石
好みれ不来るゝ宗謎の客　民
からし風ふあらわなかしらも耳たゆら　坡
粘飯を個ミちらす桂抄屋　作
花よりも離れく尺るる世の中よ　硯
雲雀の床わきらゐなきて幸　洋

来る鯉の酔吟まねあれハ二三句手向ける
おもひの七升戯れなる虹

菱の香や菊に残して七年酒　雪好改 立花

来る名もよき名付たやふのこゝろ　亞白

真間山弘法寺
知る茶屋ともちの下に煙り月　大漁

高尾まうで
きくの露切手や夕紫山　京 仙鶴

作袖ハ菊に如くれ津椎のをと　丸橋 湖常

きく活る菊や玉ハむかふの包み袖　玉蛾

来酒や席に秋も七年酒　存義

櫻のちるや其人まきけ雪の花　冲而

昔むせと霧に淋しや石の上　三更

葉名や花に結ひ行く水の泡　見龍

来る時ハ亡父蘇翁の訳み深く弟も此史の凡を考え且むかしの秋を語る
酒まもこなくなりし陰の月　楼川

月の陰材木町のあるしかな　風和

きく霧を粉まじ掬の名残哉　其英

墓原もうし秋に名乗り七年忌　夏屋

手向ばや菊も名残の十二日　尾谷

筒井より星や隔て不破の関　晩翁

菜月や流の末乃酒の味　晩晴

大輪の菜ばた蝶とよ栄ふる　晩紅

名もなかりし名月あまりの女郎花　晩山

推なある二よひ計らむ月の痕　及枝

ちる果とハ茂く名きき尾花哉　東紫

百姓乃奥ハ隠居ぞ菊畠　財峨

歌仙

毬栗のみの墜て降や星ところ

わまかく露に月の暈乃輪

満の秋横に狐の人まどはす

落へハまきて酒あはす家

手伝ミハ小鼓ならぬ大鼓

拾ふる日ならぬ帯ハ流るし

氏野
平砂
三岱
故一
梅硎
執筆

龍燈ハ例の無乃杉ずて　如

九つの子かり乳をのます犬　一

呼かけく姪蛙賣ふ簾ゑ　宗

借らく詠く節用無見る　雅

鵜の糞何そ葉ゟ入ぬらん　梅

人形　享る和泉の家　岱

書圖ふ股立低し甚しの　一

抱付くやしき角力の手代　如

幣串の芝よ病をうるし　雅

あかゞね羅ふ注文ハ明し　梅

火の側を離れて猫の尾よ狸ふ　岱

白於戸うけ菜ハきびしよ　一

待舟の梅ふ君て逢寺結ゐ　有佐

唱御聲一字永日　訥子

枯乃葉に露こそ不足ゆき十三夜　貞橘
ひつち田の稲塚近し一垣游　風至
うろ手に名乗るや李大白　文綸
名月や陣年に経の百福壽　柏船
高山の繪圖掛並へ壺祭　有佐
玉川も扇なりけりや夕その月　葵天
ぬるや屋根新しき不破の関　畔水
古きより有り数や石の露　黒巳

歌仙

末枯てゆるゝ催寺鐘の声　沾澄
さす戸引し戸耳ありのある月　有佐
俳諧のさあかき協る風入ニ而　沾山
あくはくくと鱠密くれ　沾澄
雲助ハよの岬を出て肩さかし　有佐
云ひけれとハ牝牛まゝ角　沾山

黄ハまされハ黄にて黄菊哉　少年 貞陽

同しえのハ蕗ふきらかそむし石　大汀

頬杖も及ぬ菊の盛りの南　溪雪

小男鹿や耿けとえり蘩寺　撰ニ

糸切く柳ハちるの土よあそ　圓ニ

うき雲し苔社汲や墓手桶　治撰

義人の沾話気や十三枚　桂室

鐘吹も手向の数や九月の夜　楚文

文臺や香ふの上の天津星　寸松

一面にむれねる香や盆踊　掌花

稲良の蟲話をき夕哉　花夕

壬光とかおむしや孫の月　歩閣

心なき我とふ居艸のそ　京 富鈴

七年の雨も晴川浪の月　催種

むしろまきおおぎ投出すや荻の露　紀逸

鹿なきて西ふ鐘あり夕みち　湘波

雨中にちらぬを菊のたまれ哉　思友

手を経て流れを増や菊の水　恭然

古塚哉はゝ八出の鳴き哉　拾斧

とく法の日にはれぬ玉の姿哉　文佐

栄栗や我も手向乃数ニ入　佐水

白粥の甘さや秋の夕まかり　琴侶

根を付て塚へ手向ん艸の花　露碩

極楽の花まで露の玉第　栞夫

花生にさすや直日の菊の花　有个

つまゝ菜や言後道の法恩ち　其道

去ニ艸よ残ますまで七年酒　曽川

露きえも滅ねは法の手向物　有志

露霜も深較弥や手向艸　佐笠

東の原の薄は法の教ふかし　ト常

墳墓や塚の光も七ツ色　栞國

出来菊の手入尽せし七ツ起　桒里

白萩や七年江の粥杖色　汀文

秋艸物音も其数硯筆　五璉

経緯や星も黒へて代々蚕　漁江

月の舟七里を越ば旭哉　吟國

同　古今庵連

菱の秋七里ヶ濱若黄菊哉　超月

秋寒やもし與ず酒の燗　墨川

何思ふ心毋笑へ萩底也　鯉丈

白菊の指仏するも但ヶ方　野永

一日ハ鴨も来ておけ塚の松　青羅

墓原の露やなすさやかゝす瓜　紅羅

庭の月あ遠や雲の圏隣　烏川

なのき秋を招しり香お烟哉　長湫

白萩や七度去原る袖の露　南佐

其時の露ハ江布し手向艸　隠市

酒ふよきお人も向ん菊の契　異川

しら露や枝をはなれて松の露　民砂
佛手柑や法に縁ある俤　市石
去者ハ菊　蘭乃匂ひ哉　花径
◯栗や今汲人し墓の水　梅砂
其墓のかくる忘れて稗の色　砂明
根を分る牡丹も嘉き因長哉　泉砂
云の葉もひろめてしる雁分哉　渓砂
小机に落すゝやゆゑの秋　洞波

春乃縁に蚕同し草の花　莱砂
乃引葉のまゝにまゆる契ひ哉　皐水
名付られし一字手伝ひてわれに蚕の口を勒す
秋枯や著も我菜の恩　菜水
きせ絹や身にかけする日の古衾　貞寫
古塚や見る人なし草乃花之り　栞蝶
新たる秋やうき世の常　薫佐
生秋の形見にあり筆の跡　琴佐

午寳の名も栄ふ廣把杯摘る（凡雅の味とそ在ゝすと）　氏野

世に着く其面影や錺る菜　文峰

縦横に寺の舟路や芦の花　扇賀

旅まよきひもあやなへし法の秋　訥子

題目もえぞる書わんと〇米　森砂

川すちの形をつゝしき秀君哉　八布

追福此心をわりて菜の花　鼎耳

本地人のたゝみし船や梅紅祭　蝸牛

歌仙巻尾　於芝小山編

面影み物習ハさぬ秋かぜ声　平砂

とゝり働く云の葉れ花也　莱砂

隠れ自ちる江裏の里ゝまさる　超己

ちるむけなわと舟を突出す　貞寫

篇結ひに演きゑ佳と粉うら　琴佐

ヨミ命て節木の煙むれゝうし　燕佐

狗尾の半日あそりふのこ辺　燦
生へ流り安く瓜なすらん　来
麻精先火熨斗のほしい附も有　五
前後峰塔の村囲　此
浮出し島を地形流れ行　阿
紅葉置とあつ橋のをる云　丞
八百屋さへ月に二三の糸売れて　蝶
焼てさけくと蜻蛉と見る　菜

鷲を孝行ゆへの脇さし給　只
猫研時の足ハ捨もの　超
移住の暖とおもふる汐の川　嵐
とふて叶ハぬ検校なる　此
五年まも擬宝珠まて清のかな　有佐
浮てゑよ彼岸乃西　五

後序

夫之花散而子結呼秋之白似而
霜之衰凄止四時之変化人間
之栄枯厥好也如維纏会者七年
之昔語也矣先師貞翁残所謂
中秋尓満白粥一句而終焉如眠
也止毛其長月之永来別与者也
発止仕丘則其門尓者三子者而

其志之富子風雅留趣仗波奈者
更也彼遊辛辞雩尓之変不言曽
點雅量増而不求子貢行道者
瀲後毛堅守遺余而旭曦和白雲
之曲者尼中尓獨菴者消去手之
初秋之露而阿叟尓結一蓮契
者今也有斗之南子爾之集尓
其視而或謝師恩止或不忘往事

シ卅一

與所嗚呼呼乃変暮化之世也怱
社中故人多止乗尓両子健也則亡
出昔序今而尚慕七尺之影居草
感三世之縁而自他之咏吟集若干
吾儕人不為作者者之戸為後序之
主事寂可笑詎連登纔知己之一
節而深筆于藁窗之几上侍秋収

寛保辛酉之秋九月

寛保元辛酉年秋九月

書林

武江 本町三丁目 西村源六 梓行

京都 堀川錦小路上九町 西村市郎右衛門

武江 吉田魚川 彫刻